

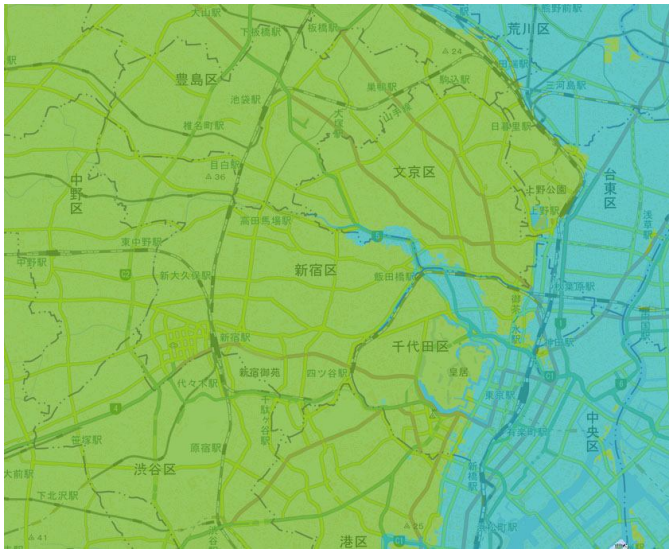
「文京区のハザードマップ(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

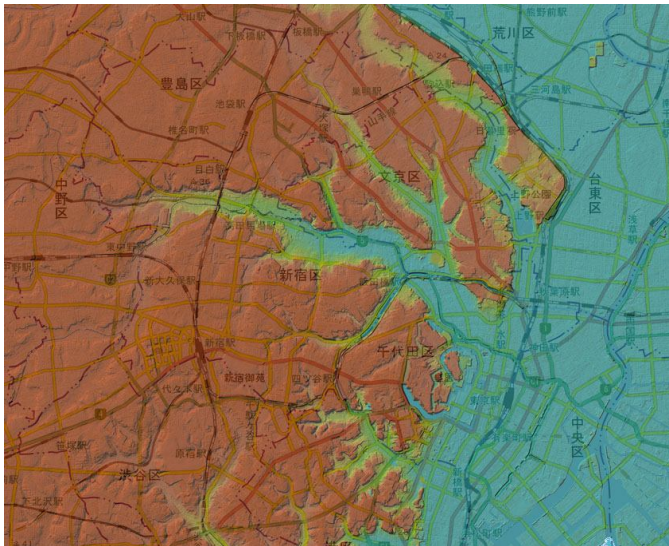
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

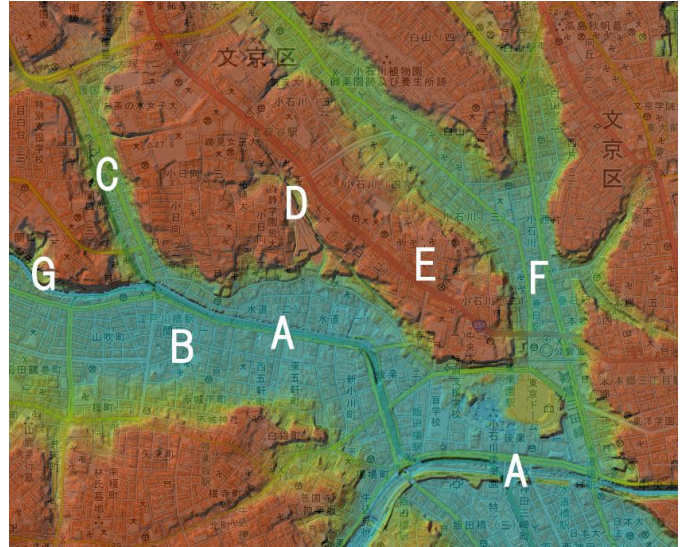
台風や前線による大雨によって、川の流域や下流に洪水が起きるか否かは、さまざまな要因で決まる。堤防の高さや強さ、川の幅や深さ、ダム・遊水地・地下貯水池などの一時的貯水場所の有無などだ。しかし、一番決定的な要因は、「標高」である。今回の千曲川の氾濫でも、やはり低い土地の場所が洪水に見舞われた。自分の住む文京区の場合はどうだろうか?自分なりに調べてみた。



これは、山手線一帯の「色別標高図」である。通常の地図は、標高100mあたりまでは一様に緑色で表現されるので、そのように標高データを入力した。水色は10mまでの標高(低地)である。これだと、山手線一帯は全く起伏のない「平原」のように見える。



しかし、データ入力の方法を変えて、5mごとに色を変えて地図を作製すると、まったくちがう地形が見えてくる。山手線の内側(特に西半分)は、武蔵野台地の東縁にあたる。その大地を川が削り、多くの「浸食谷」と、浸食を免れた「舌状台地」が入り組んで、非常に複雑な地形になっていることがわかる。



特に文京区の南東部は、この特徴的な地形が顕著に現れている。(2ページ目に拡大画像) Aが神田川で万一氾濫を起こすとこの地域に洪水を起こす原因である。Bが文京区関口町で、ハザードマップでも一番危険な区域だ。Cは神田川の支流の音羽川の浸食谷で、現在は音羽通りの商店街になっている。Dは茗荷谷で、これも小規模な浸食谷である。Eは小石川舌状台地で、小石川三〜五丁目の大部分を占める。Fの小石川1丁目のあたりも3方向の浸食谷の水が集まる場所で、水害の危険性が高い。Gは神田川が段丘崖に迫り、区内で土砂災害の危険性が最も高い場所である。



こうした正確な地形の情報と、区の公表しているハザードマップを照合すると、やはり、標高の低い土地が圧倒的に水害のリスクが高いことが理解できる。



